

# Webを用いた遠隔支援システムによる 地域における小児食物アレルギー診療の 均てん化プロジェクト

大学院生命科学部小児科学講座 特任助教 緒方 美佳

## 目的とするSDGsゴール



## 1. 教育・研究の概要

Web画像通信を活用し、熊本大学小児アレルギー専門医と地域病院小児科医を接続する遠隔支援体制を構築した。地域医師が初診（初期評価）を担い、月1回のWebカンファレンスおよび隔月の専門医出張外来により後方支援を行う、アウトリーチ型・伴走型の診療モデルを実装した。本取組は、限られた専門医資源を有効活用しつつ、地域で質の高い小児食物アレルギー診療を完結させることを目指すものである。

## 2. 教育・研究の目的

- ① 地域における専門医アクセス格差の是正と、食物アレルギー診療の均てん化
- ② 罹患率が高く予後に影響を及ぼしやすい乳児を含む症例への早期診療介入を推進
- ③ 地域医師・多職種の診療力向上を通じた、専門医依存型医療から地域自走型・専門医後方支援型への構造転換と、持続可能な診療体制の構築
- ④ 医療資源の効率的活用と患者移動の削減による、カーボンニュートラル推進

## 3. 今年度実施した教育・研究

### ・本年度中の教育・研究の取組



#### ① 診療の均てん化：

専門医がアレルギー外来を開設する関連病院4施設中 1 施設にて、**常勤小児科医（非アレルギー専門医）が、1月よりアレルギー外来を月 1 回開設し、初診 8 名、再診 35 名**の食物アレルギー児を診療した。予め問診票のテンプレートを作成し、必要な情報を効率的に収集できるようにした。

#### ② 診療の質の向上：

月に1回、該当施設の小児科医3名と、熊大の小児アレルギー専門医とで**Webカンファレンス**を行い、**全症例について**診療方針を検討した。患者の個人情報匿名化され、患者はその結果を踏まえた形で地域の勤務医の診療を受けた。血清特異的IgE検査にあたっては残余検体を保存し、カンファレンス後に追加検査を施行することで、過剰な検査や、追加検査による児への侵襲を防いだ。

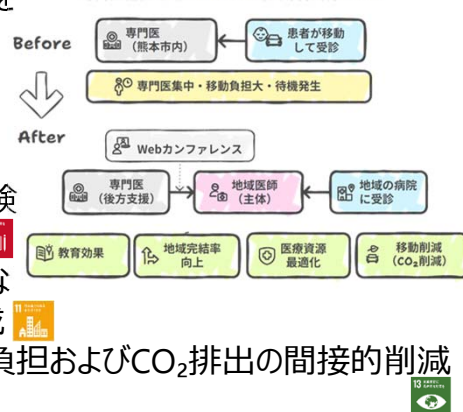
#### ③ 安全性の担保：

期間中に地域の常勤小児科医が6例の食物経口負荷試験を施行した。検査前に、**全症例について**、既往と検査データを基にWebカンファレンスで重症度と負荷量を十分に検討した。検査中の症状出現に備え、**大学の専門医に電話相談できるバックアップ体制**をとった。また、地域の医師による負荷試験は、重症例を除き、重症例は専門医がアレルギー外来に派遣される際に施行した。

### ・上記の取組によって生まれた成果（SDGs達成へどのように貢献するのか）

- ① 医療アクセスの均てん化と地域完結率の向上：乳児4名を含む初診8名を地域で早期診療介入。隔月の専門医初診外来を待たずに初期評価を実施できる体制を確立。
- ② 医療資源の最適配分：専門医は症例を後方支援し、必要例のみ直接介入する体制を整備し、人的資源の効率化を実現。
- ③ 安全性と質の担保：負荷試験6例を地域勤務医が安全に実施。事前検討・重症例の層別化・電話バックアップ体制により、リスク管理を制度化。
- ④ 持続可能な地域医療基盤の形成：地域常勤医が主体的に診療可能な体制を確立。教育的波及効果により、地域医療の自走化の基盤を形成。
- ⑤ 環境負荷軽減：患者の熊本市内への移動削減による時間的・経済的負担およびCO<sub>2</sub>排出の間接的削減。

専門医偏在地域における人的資源再配分モデル



### ・今後の展望

本モデルは、**専門医偏在地域における再現可能な地域医療支援モデル**として、県域展開を視野に入れる。

- ・ 定量的評価指標の導入（紹介率、地域完結率、検査適正化率）
- ・ 地域の自治体・保健師・学校との連携強化し、食物アレルギーに関する知識の向上
- ・ 他医療機関への横展開と、小児の他疾患への診療拡大